

洗練された  
大人のおとぎ話 10

## 黒蜥蜴 — そして60年代邦画の華麗なダイヤモンド

エッセイスト 岩田 裕子

かつて、映画は夢の世界だった  
豪華な暮らしや甘い恋、絶世の美人や  
しゃれたコメディを映しだし、観客を、ひ  
とときの幻想世界に招き入れた。

宝石というきらびやかな小道具は、映  
画という仮そめの夢の宮殿を、いっそう  
きらきらと輝かせてくれた。

やがて宝石店のほうも、スクリーンが、  
巨大な動くショーウィンドーであること  
に気づき、積極的に商品を貸し出すよう  
になる。

宝石と映画の蜜月。

それは、60年代後半まで続く。

やがて、ニューシネマが登場し、  
夢に酔いしれた人々の頭に水を  
ぶっ掛ける。贅沢や洗練された  
コメディになれた眼には、身の  
蓋もない貧乏やみじめさ、危険  
な生き方が新鮮にさえ、映った  
のだ。

そんなこんなで、70年代以降、  
宝石の登場する映画は数少なく  
なっていく。

私がいままで、この連載で、ご  
紹介させていただいた映画たち  
も60年代までのものがほとん  
どなのだ。

今回は、日本で60年代につく  
られた映画をいくつか取り上げ  
てみた。とくに、おしゃれで、あ  
まり知られていない、エンター  
テインメント限定である。

宝石のでてくる邦画を探るのは、結構、  
難題なのだ。

ジュエリーの歴史を考えれば、欧米に  
くらべ、数限られているのも、仕方がない  
かもしれない。とはいえ、古事記には、翡翠  
の女神が登場し、七宝として、瑠璃(ラ  
ピスラズリ)や瑪瑙が数えられた日本  
である。日本の宝石映画(宝石を題材にした  
映画)も、楽しさでは、負けていない。

珍しいところをご紹介します。昔、テレ  
ビの変な時間にみた、幻の名画である。

1962年、大映でつくられた井上梅次監  
督作品で、その名も「宝石泥棒」という。二  
組の宝石泥棒が巻き起こすラブ・コメディ  
だった。

舞台は、あるリゾート地。有閑マダム  
の所有する伝説的なダイヤモンドを狙って、  
サヨコ(山本富士子)とレイコ(野添ひとみ)

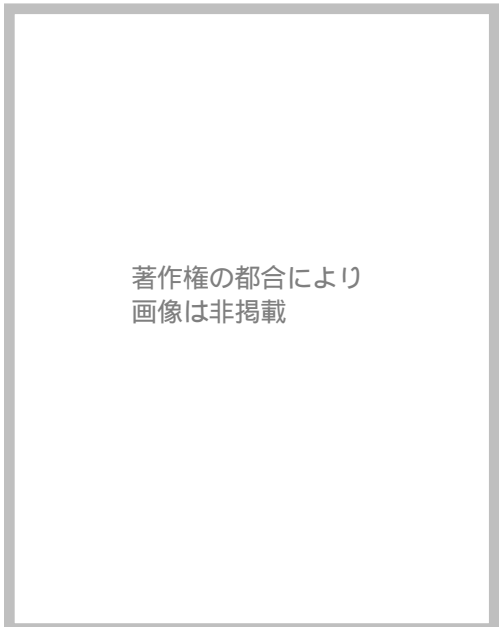
の色っぴい女泥棒組と、ジレットのケン(川  
口浩)とゴロウ(船越英二)のプレイボー  
イ組が、争奪戦を繰り広げる。ジレットの  
ケンの奔放な魅力に、まずは、獲物のマダ  
ム、それから、サヨコが夢中になり、サヨ  
コにまわりつき自称推理作家(菅原謙治)  
も加わって、恋のほうも争奪戦だ。

さて、宝石は、誰の手に、というお話だが、  
物語は二転三転、スピーディで、盗みの手  
口も仕掛けがいっぱい。ゴージャスさは、  
ヒチコックの「泥棒成金」に負けるけれど、

それを三島由紀夫が、耽美的に戯曲化し  
ている。

大阪の宝石商、岩瀬家が所有する巨大  
なダイヤモンド「エジプトの星」。妖艶な  
マダム、緑川夫人(京マチ子、実は黒蜥蜴)  
は、それがほしくてたまらない。

岩瀬家の令嬢、早苗(叶 順子)を誘拐し、  
彼女と引き換えにダイヤモンドを手に入  
れようと、企てる。誘拐を阻止するため、  
やってくるのが、「犯罪から愛されている  
男」名探偵、明智小五郎(大木 実)、至上の  
宝石をめくり、命がけの戦いが繰り上げ  
られる。東京タワーを取引場所に指定し  
たり、黒蜥蜴の船にもぐりこんだ明智を  
海に放り込んだり。自ら殺した明智小五



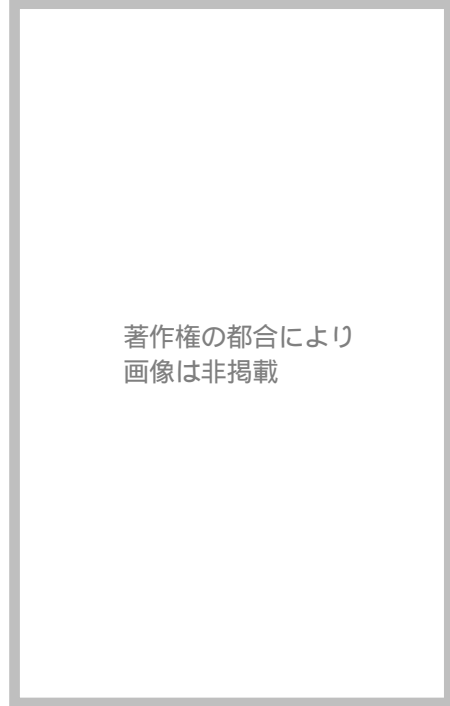
「黒蜥蜴」1962年大映制作  
監督 井上梅次 主演 京マチ子 大木実 三島雅夫 川口浩  
写真提供 角川映画

ドライなつくり、テンポのいい会話で、と  
にかくおしゃれなのである。ウエットな  
日本の美女の山本も、この映画では、ク  
ールでカッコいい。川口浩は、育ちがよく、  
スマートだけど、やんちゃな男の子の雰  
囲気があって、わたしもすっかりファン  
になってしまった。

なぜ、幻といったかということ、めったに  
みられないからだ。私自身、今回かなり探  
したのだが、ビデオもみつからず、これは、  
記憶で書いている。ぜひもう一度、見たい  
ものだ。

同じ井上梅次監督が、もうひとつ、こち  
らは有名な宝石泥棒の映画を撮っている。

ご存知「黒蜥蜴」(1962大映)である。美  
貌の女賊、二の腕に、トカゲの刺青をい  
れている黒蜥蜴と名探偵、明智小五郎が  
対決するあのお話だ。原作は、江戸川乱歩。



「黒蜥蜴」1968年松竹制作  
監督 深作欣二 主演 美輪明宏 木村功 川津裕介  
写真提供 松竹 株

郎へ、愛していた、と涙をこぼす黒蜥蜴。  
愛していても、戦わねばならず、それとい  
うのも、美しい宝石への憧憬は、愛よりも、  
限りなく深いからで、美こそすべての黒  
蜥蜴は、美女や美青年を剥製にし、自分の  
コレクションに加えている。おどろおど  
ろしくはあるのだが、ミュージカル仕立  
てになっているので、なんととっても楽  
しい映画だ。唐突に始まる歌やダンスには、  
少々たじろぐ。

黒蜥蜴や部下はもちろん、剥製にされ  
た人間たちも踊るというキッチュさで、

この辺は、好みが別れるところだろう。笑ってみられる怪作というところ。

この「黒蜥蜴」は、1968年に、松竹により再映画化されている。

こちらの監督は、「仁義なき戦い」や、最近では「バトルロワイヤル」で有名な深作欣二。黒蜥蜴は、決定版ともいえる美輪明宏。三島由紀夫は、美輪を称し、「黒蜥蜴がここにいる」といったとか。

明智役は、七人の侍などにも出ていた木村功で、大木実やテレビでの明智役、天地茂と比べると、スマートで知的な明智となっている。ストーリーは同じだが、美しい男女を剥製にして飾るという倒錯した美学は、こちらのほうがインパクトがあった。見たのが、中学生くらいだったからかもしれないが、夢にみるほど、驚いた。恐くもあるし、しびれるようなエロティシズムがここにある。また、黒蜥蜴と明智小五郎の、宿命的な恋愛も、美輪版のほうが、濃密にえがかれていた。

注目したいのは、黒蜥蜴に魅せられ、忠実な部下となった美青年、雨宮潤一役である。早苗を誘拐するのだが、その後、二人は恋におち、緑川夫人を裏切ることになる。京マチ子版では、川口浩だった。美輪版では、川津祐介が演じている。「宝石泥棒」では、男の子っぽさが魅力的だった川口浩だが、こちらでは、さわやかすぎて、普通の好青年。異様な世界に魅入られた妖しさが感じられない。

美輪版では、大島渚の「青春残酷物語」や、増村保蔵の「卍」などで、妖しい演技をみせた川津祐介。こちらの潤一は、黒蜥蜴に憧れているというより、同類のにおいがする。彼自身が倒錯した美意識の持ち主で、魔界の住人たる不思議さを、十二分に感じさせた。剥製にされたら、かえって喜びそうな美青年なのである。

喜んで剥製にされてしまった作家がいる。戯曲化した三島由紀夫である。剥製として、特別出演し、肉体美を披露したのである。彼が黒蜥蜴の美輪にそっとキスされる時、自ら作り出した耽美の世界が完成した瞬間ではないだろうか。

ややこしいのだが、三島は京版のテーマ曲を作詞している。

宝石とともに寝る夜は  
冷え冷えときらめく臥所  
不眠症の月  
凝った刺青

熱い血は下水道に流す  
美輪版の場合は、美輪明宏が、作詞している。

誰も入れぬ ダイヤの心  
冷たい私の心の中には  
どんな天使も 悪魔の囁きも  
男の愛など届きはしない

どちらの歌が、よりきらめいているだろうか。

もうひとつ、めっちゃめっちゃエンターテインメントな映画のこと、書いてみたい。

「べらんめえ芸者まかり通る(1961年・東映)美空ひばりが柳橋の芸者役で、堅物のエリート外交官に、高倉健が扮している珍しい作品だ。

羽子板の中から、美空ひばりが出てくる場面が、タイトルバック。

地図のしみみしたいなアフリカの小国コロンダ王国。この国は世界屈指のダイヤモンド産出国なのだ。その採掘権をめぐり、外務省と、悪徳商社がしのぎをけずる。商社のバックには、ソビリカという大国が黒幕になっている。

来日したアジバ(世の歓迎会が椿山荘(リアル!)で開かれ、芸者小春も呼ばれる。ひばりの黒田節に感動した王様は、星の形をした大きなダイヤモンドのブローチをプレゼントするのである。

借金から商社側になったひばり、採掘権の行方はどうなるだろうか…

あまり古いので、見ている人はいないだろうが、一見の価値はある。当時のヒットシリーズであり、ひばり、建さんといった人気者がでているので、最近の低予算映画では、考えられないほど凝った華やかなつくりとなっている。たとえば触先に翼のある怪物のついた金ぴかのボートを、インド風の衣装をつけた王と着物姿の小春がこぐシーン。川には、睡蓮があちこちに咲き…

国籍不明の見たこともない独特の世界。ぜひ堪能してほしい。



岩田 裕子(いわた ひろこ)

東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学文学部卒業(西洋史専攻)編集者を経て、少女雑誌、ファッション誌などに記事を執筆。現在は、宝石・妖精のエッセイストとして活躍している。

<http://www.geocities.jp/yaraneko1313/index.html>

近況

病気から帰還し、やっと新しい本、河出書房新社の「あなただけのジュエリ(仮題)」に着手することができました。ホームページも作成中ですので、ご覧いただけましたら、幸いです。

岩田 裕子 作

## 妖精のように生きてみたい



河出書房新社 価格 1,324円

ホリー・ゴライトリーのように自由で気まま、恋するのが仕事、なのが妖精たち。彼らの生き方を参考に、いさぎよく、ドラマティックな人生をおくってみませんか。12か月の妖精たちも登場するので、あなたの生まれ月の守護妖精は何かがわかる。宝石にまつわる妖精もいるのよ。どんな妖精かは、読んでの楽しみ。(作者より)

読んでみたい方は

河出書房新社 03)3404-1201にお問い合わせください。

岩田裕子 著

## 「冷たいジュエリ」

本物は口にあてると冷たい、だから「冷たいジュエリ」



双葉文庫 価格 540円

木の葉の色も艶めく秋、宝石の本をじっくり読んでみるのもいいかもしれません。

というわけで、バラバラめくっていただけると、うれしいのが「冷たいジュエリ」。

宝石のもつ毒の部分、人間をとりこにしてやまない蠱惑に、焦点をあてて書いた本です。それぞれの宝石の性格を意識しながら書いていたら、人間にとってもよく似ているので驚いた記憶があります。